

イ・オクソン（李玉善）・ハルモニの証言

私は韓国のナムムの家から参りましたイ・オクソンと申します。年は80になります^(注1)。

皆さんにこういうお話をするに、私はとても申し訳ない気持ちもございます。申し訳ないし、恥ずかしいことも沢山あります。けれども、私が死ぬまでにこうした歴史的事実を皆さんにお伝えしたいし、残していかなくてはいけないと感じております。こういったことは、二度と戦争が起こらないようにするためにも必要なことだと、私は感じております。

私は韓国人です。釜山で生まれました。15年間釜山で育ちました。7歳のころ、とても学校に通いたかったんですけども、家庭事情があまりよくなかったので、学校に通うことができませんでした。

15歳くらいで、家庭事情によって、蔚山（ウルサン）という韓国の南にある所へ養女に出されました。そこで暮らしている時に、ある日、そこの主人のお使いで市内に出ました。けれども、市内に出たところで、知らない男2人に連れて行かれました。その時の男性2人は、日本人なのか朝鮮人なのかわかりませんでした。1人は日本語を喋っており、もう1人は朝鮮人かなと思われました。15歳の幼い子どもでしたから、到底抵抗しきれずに捕まえられて、腕を引っ張られて連れて行かれました。行ったら角のところに大きなトラックがあり、トラックは中から外が見られないように、テントなどが張られていました。私は荷物のように投げ込まれました。

荷台に打ち付けられたので、あまりにも痛くて泣き出すほどでした。泣き終

わって起きて見たら、その中は私だけではなくて、他の5人がいて、私を合わせて6人の女性がいました。

泣きながら家に帰してくれと訴えたけれども、そうすればするほど、手を縛られたり、足を縛られたりしました。晩に汽車に乗ってどこかへ連れて行かれました。乗っている間は、アメリカ行きの汽車なのか、中国行きの汽車なのか、日本行きの汽車なのかも知らされておらず、その汽車はどこにも止まらず、結局中国行きだったんですね。

中国に到着したのは、図們 (トムン、吉林省) というところですよ。そこに到着して寝たのが、コンクリートではられた暗くて、寒い牢屋のような部屋だったんです。とても寒くて寂しかったです。6人一緒に行ったんです。けれども、あとの5人は一緒に過ごして、私だけが1人部屋に入れられたんですね。別に日本に対して悪い事など一つもしていないにもかかわらずです。一人にされて15歳の私としては、とても寂しくて怖かったです。その時あまりに寒くしんどかったので、私は足を痛めてしまいました。連行されたにもかかわらず、自分の足で行ったのではないかと誤解されたりしました。(私たちは) 12歳から15歳で「慰安所」に連れられて行ったわけで、「慰安所」がどういうことをやっているかもわからなかったです。

私たち女は、山に草取りに行った時に連行された人もいれば、水汲みに行った時に女の子が連行された場合もあれば、学校で勉強している最中に連行された人もいれば、ただ、家で家事をしている間に連行された人もいれば、いろんな意味で、自分の意思ではなくて、突然連れられていったわけです。男性も女性も沢山人が連れられていきました。穀物などは、供出する場合がありますね。国家に供出する場合がありますけれども、人間を供出するなんてことはありません。私たちは(ある意味で)人間が供出されたわけです。男は連れられて行って強制奉仕をする軍人になりましたし、女性は「慰安婦」にさせられました。日本人の軍人がいるところであれば、どこにでも「慰安婦」がいたと思います。日本は朝鮮の少女たちを強制的に連行しておきながら、そんなことは

ないと、うそを言いつづけています。

こうやって連れられて行って、囚們で一晩寝た後、あまり食べさせてももらえず、ずっとおなかを空かせていました。日本人兵士たちは食堂で、おいしそうなおかずでご飯を食べたりしていました。けれども、私たちはおなかを空かせたままで、連れられていった時の夏服のままで寒さをこらえなければいけませんでした。6人だったんですが、その中で4人はまた別のところに移されて、私を含めて2人はまた汽車に乗ってどこかに行かされました。

汽車に乗せられて連れていかれたところは、延吉(ヨンギル)という所です。延吉に到着して、東飛行場の中で肉体労働をさせられました。その場所は電気の流れる鉄線で囲まれていて、逃げる事が出来ず、逃げようと何度か試みても、電気が通っているのが怖いし、焼け死んだ犬の死体などが置かれていたりしました。強制的に働かされ、一切お金をくれたりはしていません。

こうして電線の張られた場所の中で、強制的に仕事をさせられました。軍人たちがずっと見張っていて、逃げるにも逃げられませんし、死にたくても死ねない状況でした。着るものも連れられていった時の服だったので、夏物ですし、履物もありませんし、仕事をするときに、ちゃんと仕事をしないということで、毎回鞭で打たれたりして、いろんところが血まみれな状態で過ごしました。死にたくても死ねませんし、逃げたくても逃げられません。こういう状況で働いておりました。けれども、日本人たちは、ハルモニたちがお金儲けのために「慰安所」へ行ったのではないかと言います。これはどういうことなのかと、私は問いたいです。

連れて行かれてからあまり食べさせてももらえず、たまに小麦で作られた饅頭を1つくらい貰いました。けれども、まだ歳も若い成長期だったので、小麦で作られた饅頭1つではとてもおなかが空きました。とても寒かったし、鞭で打たれながら仕事をして、仕事も大変忙しかったので、体はくたくたな状態でした。仕事は大変忙しかったけれども、晩にはみんなで集まって、どうやって逃げられるかという討論、議論もしたりもして、逃げるための試みも何度か試

みました。けれども、逃げようと思ったら、電線に犬の焼け焦げた死体などがあつたりして、見たら怖くて逃げようとする勇気さえなくなりました。

仕事が余りにも忙しくて逃げることも出来ず、闘争に励みました。こぶしで壁を打ったり、水を打ったりしながら闘争していたら、軍人たちが来て、私をどこかに連れて行ったんです。その時私はこれで家に帰されるんだと思って、喜んだわけです。飛び跳ねながら喜びました。けれども、家に帰されたわけではなくて、その時に入れられた所が「慰安所」なんです。その時点から「慰安所」に入れられたのです。私は「慰安婦」が何をするところかも知らず、連れられて来られたのです。けれども、格好は血まみれになっているし、服は汚いし、泥だらけだし、髪の毛も汚いので、「慰安所」に連れて来られたとき、慰安所の主人は、こんな汚い格好では「慰安婦」として働かせられないと言って、主人のお金で、着物や下駄や足袋を買ってくれたんです。私たちはお金がなかったので、買ってくれるのは、ただでくれるのかなあと思ったんです。けれども、あなたたちがお金がないから代わりに買ってあげるわけで、あなたたちが「慰安婦」の仕事をして働いて返しなさいという形だったんです。ところがこの借金を返すにしても、私たちは一切お金もらう事はありませんでした。

その当時13歳から15歳の私たちは、強制的に連行され「慰安婦」にさせられて、一日に40人から50人にあたる軍人の相手をさせられました。話をちゃんと聞いてなかったり、言っていることを聞いてない時は、人を皆立たせておいて刀で刺したり、それでも話を聞いてない時は、その人を刀で刺して死なせたりするわけです。それを私たちが見ているところでその人を刀で死なせたりして、死なせた人を埋葬もせずに、ただ町に捨てるわけです。犬が食べられるよというの意味で、捨てられるわけです。こんな悔しいことがあると思いますか。

軍人たちは私たちにここで話の出来ないようなこともさせます。しかし、私たちがその言うことを聞かなかつたら、刀で体を切り刻んだり、痛めつけたりします。ある日少尉がやってきて、嫌がる私に無理やり相手をさせようとしま

したので、反抗すると私のことをひどく殴りつけはじめました。気を失いそうになっても殴られ、それでも私が言う事を聞かないと、今度は刀で私の体を切りつけたのです。(右足の刀傷を会場に向けて見せる) 今ご覧になったような傷が、体の中に沢山あります。こういう風にひどい目にあわせるのに、私たちが自分の意思で「慰安所」に行くわけがないです。それなのに、私たちがお金儲けで自分の足で行ったのではないかと日本人たちが言うのは、話にならないと思います。「慰安所」というところが何をするとところかも知らず、軍人と遊ぶところなのか、お話をするとところなのかもわからない「慰安婦」なのに、自分の足で行ったということはありませんし、話をしようとしても通じないし、刀で切り刻みながら、暴力的な形で(強姦が)行われる所とも知らないのに、自分の足で行くとは考えられないのに、日本人の方はお金儲けで、売春のために自分で行ったのではないかという話があるのですね。考えられません。

とても息苦しくてこれでは生きられない、親も兄弟も親戚にも会えず、これでは死んでしまうのではないかと思い、一回機会を見て逃げようと思ったのです。逃げようと思っても逃げられなかったのですが、ある日、機会を見て逃げようと試みたわけです。「慰安所」の中庭はとても広くて、平日はそんなに多くの軍人が来るわけでもなく、中庭に軍人が全部納まるくらいでした。けれども、週末は軍人の休日なので、週末ともなれば、沢山の軍人が来て、中庭いっぱいでは納まらず、門を大きく開いて外まで並ぶわけです。沢山人が並んでいる隙を見て私は逃げようとして、一回逃げました。逃げて外に出てきたら、持ってきたお金は一銭もないし、おなかはずいているし、広い中国の中で道はわからないし、道をさまよいつつ逃げました。けれども、逃げてる最中、あちこち道をさまよっている間に軍人に見つかって、「慰安所」に戻されました。逃げられず戻されたわけだから、ひどい目にあうわけです。鞭で殴られたり、すごくひどく殴られながら、「もう逃げないか？」と問いただされましたが、私は、あなたたちがまたこんなにひどいことをするのだから、逃げないわけがないでしょうと思い、「また逃げてやる」と言い返しました。すると、「逃げる

のか?」というように、再び鞭で打ったりしました。それでも、降伏しなかったら、今度は憲兵を呼んで、殴ったり蹴ったりするわけです。憲兵の殴り方というのはひどくて、普通の殴り方ではなくて、人間扱いの、規律を違反した罰としての殴り方ではなくて、「朝鮮人は死ね!!!」といわんばかりのようなひどい殴り方です。

15歳で中国に連れて行かれたわけですから、58年経ちました。2000年になってやっと韓国に戻って来たのですが、お父さんもお母さんももう亡くなっておりまして、親戚も誰もいませんし、私自身も死亡届が出ていて、国籍もない状態でした。一度、元「慰安婦」の人にほんの少しのお金が出されたということから、売春という形で、お金儲けのために「慰安所」に行ったのではないかという話があります。一時間あたりいくらという形でお金をくれるわけですが、そのお金はすぐ管理人に渡さなければなりませんし、私たちが渡されたのは、こんな小さな紙切れ1枚だけです。お金儲けに行ったというのはありえない話です。日本人たちはどうして私たちに対してそういうふうに言って、罪を犯した記録を出さないのか、私は知りたいです。私を「慰安婦」として連れて行って強制労働させて「慰安所」に送ったわけだから、私に関する記録があるはずですが、「慰安所」にいる時は、日本人の「トミコ」という名前もありましたし、そういう記録が残っているはずなんです。そういう記録はきっと日本の軍隊や部隊で管理しているはずなんですけれども、そういう記録を出さないでいるわけです。さっきの学生さんたちのお話で、記録は焼かれたということを知りましたが、どこかに残っているその記録を出してほしいです。日本はなぜ隠そうとするのですか。60年経った今でも、私の戦争は終わっていないのです。

私は戦争が終わったことも知らされず、置き去りにされました。それから55年も、韓国に戻ることはできませんでした。戦争が終わって60年以上が経ったわけですが、日本では今何をしているのでしょうか。ハルモニたちが皆死ぬことを待っているのでしょうか。ハルモニたちは皆もう80歳を過ぎ、90歳を越

えた人もいます。今年でさえも17人のハルモニが死んでいきました。ハルモニたちが死んでいなくなれば、日本人の罪もなくなるとでも思っているのですか。自分たちの罪に対して、ハルモニに謝罪するべきだと思うんです。どうして謝罪しないのですか。日本の政府は、お金の賠償はしていません。日本はお金がないのでしょうか。そうではないでしょう。今きっと日本は、私たちに賠償しないで、私たちに賠償するお金で、新たな戦争をするための準備でもしているのではないのですか。私を含めて、ナムムの家の人たちに賠償してほしいです。私の場合、ナムムの家がなかったらどうやって生きていたと思いますか。帰ってきた当初は、戸籍もなければ、両親をはじめ姉妹兄弟のほとんどが亡くなっていました。戸籍を戻したいと思ったんですが、戻すことも出来ませんでした。私をこんな目に合わせて、家族と離散させて、こういう状態にした日本の人たちは、どうして自分たちの罪を認めないのでしょうか。

ハルモニたちは日本の犬よりも下の身分です。日本で暮らしている犬のほうがよっぽど幸せだと思います。日本の家庭では犬が死んだらちゃんと犬のお墓を作って、私の家族、私たちの犬という形で墓までも造るんですね。けれども、ハルモニたちにはどういうことをしたんですか。いったい何人のハルモニたちが死んでいったと思いますか。何十万人が死んでいきました。死んでいったハルモニたちは、墓もなく死んでいったんです。日本が過去の歴史を認めず、謝罪もせず、こうやっているのはどうしてなのでしょう。日本の歴史を考えてみてください。さらに最近の日本の事情を見てみてください。最近の日本の学校で学生をレイプしたり、いろんな悪いことが起こっているのではないですか。日本人の男性というのは、どういう人たちなんですか。ちょっと考えてみてください。またさらに、日本で暮らしている在日朝鮮人の学生のことですが、日本でずっと暮らしながら学校にも通っていて、日本で生まれ育ったにもかかわらず、朝鮮人であるということによって迫害されたりしているのではないですか。日本で生まれて育ったら、同等の権利を与えられるべきではないですか。日本人と同等の権利も与えないのは、在日朝鮮人を余りにも見下しているのではない

か、と問いたいです。こういう話を全部含めて戦争と平和を考えてください。ずっと戦争ばかりしていくのですか。平和の道を歩んでほしいです。平和の道を歩むためにも、がんばってほしいです。

今でも、「慰安婦」として連行されたハルモニたちが中国に残されています。解放を迎えたことも知らず、お金もなく道もわからず、ずっと過ごしていたわけです。解放した後も余りにも生活が苦しくて、中国で同じく軍隊勤労奉公隊という、軍隊で来た韓国人と結婚して家庭を築いたり、また中国人の男性と家庭を築いたりして、今に至っているわけです。解放を迎えた後、日本の軍人たちは自分たちだけ日本に戻りました。連れて行った時は強制的に「慰安婦」として連れてきたくせに、戻る時はハルモニをそこに置き去りにしたまま、自分たちだけ逃げたというか、戻ったんです。そういうことがあって、「慰安婦」生活をしたハルモニたちは中国にまだ未だに沢山残っているわけです。そういうハルモニたちを、連れて行く時に強制的に連れて行ったのと同じように、今連れ戻してくるのも、日本の政府がやるべきことではありませんか。日本の政府は私たちが嘘をついてると、何を言っているんだ、そんな事実はないんだと歴史を偽っていますが、私たちは嘘をついているわけではありません。嘘をついているのだったら、私のこういう傷はどういうふうに説明すればいいんですか。

また、ハルモニたちが自分の名誉を回復しようと思って、水曜集会みたいな運動に行ったら、どういうことになるかということ、町中で後ろ指を差しながら、あの人たちが「慰安婦」だった人たちなんだ、あの人たちは今精神がまいっているのだというふうに言われるわけです。私が精神がまいっているのでしょうか。精神がまいっているのであれば、呆けているのであれば、私ははたしてこういう場所に来て、こんな証言ができるのでしょうか。私が嘘を喋っていると思いますか。ここにお集まりになった皆さんも考えてみてください。はたして皆さんには責任がないのでしょうか。ここにお集まりになった皆さんにも、私たちハルモニの、ナムムの家のハルモニの問題に対して、解決を見出す責任があ

るのではないのでしょうか。

ただ単純にお金をくださいと言っているわけではありません。皆さんが責任をもって私たちの問題が解決できるように、力を合わせてほしいです。私を応援してほしいです。ここに集まった皆さん一人ひとりが責任を感じて、私たちを応援してくれることが、私たちの問題解決に一步近づくのではないのでしょうか。

日本は韓国を脅迫し侵略して36年間も支配したわけです。血の涙が流されました。その36年間の支配というのは血まみれの支配であり、解放を迎えて60年になった今でも、日本は自分たちの行った悪行を謝罪しないではないのでしょうか。日本は、はたしていくらで補償できるんだと思いますか。36年間の血まみれの歴史を一体いくらで補償できるんだと思っているのですか。それをお金に換算できると思いますか。日本政府はハルモニたちのところに来て土下座をして謝罪をするべきです。お金で換算できないわけでしょう。せめてハルモニたちの前に来て土下座して謝罪してほしいです。この36年間流した血に対する賠償をしなければならないと思います。

私は中国に行って58年間ひどい生活を送ったわけです。山に登って首吊り自殺を試みたこともありますし、薬を飲んだこともあります。結局自殺せずに済んだわけですが、このような私の歴史も悲惨なものです。朝鮮人も日本人も人間としてなら同じです。日本の人は良心があるのなら謝罪するべきですし、補償すべきです。ハルモニたちが死ぬことを待ち望んでいるのですか。ハルモニたちが死ぬまで待っているんですか。聞きたいです。ハルモニたちは歳をとっていくし、もう大分高齢になっています。ハルモニたちが死ぬことを待っているのであれば、一日も早く、そのハルモニたちの“恨 (ハン)”を解くという意味において、賠償するべきだと私は思います。そういうことのために、この場でお集まりになった皆さん一人一人に解決の責任があると言いたいです。私たちを応援してください。闘ってください。補償を働きかけてください。補償してください。

注

- (1) 韓国では四捨五入して年齢を伝える時があります。「もうすぐ80歳だ」というぐらいにとらえてください。イ・オクソン・ハルモニは戸籍では1928年生まれですから、実際は77歳です。かぞえ年では78歳です。(矢嶋)

付 記

イ・オクソン・ハルモニのこの証言の後、補償のあり方や「慰安婦」問題にどう取り組むかを考える本学の学生たちの活動、ハルモニが証言を続ける意義やナヌムの家でのハルモニたちの生活などについての質疑がなされた。オクソン・ハルモニの「沢山の証言をしてきましたが、空しいものです。ただ口が痛いだけで、ただただ無駄な努力だと感じる場合があります。日本ではこういう証言を聞いても、一言の謝罪もありません。空しいところだと言えます……(中略)……今生きているのが不思議なくらいです。耳も悪くなりまして、いいところは一つもないのですが、今こうして皆さんの前でこういう歴史的な事実をお伝えすることでき、歴史的な証言を残せることが、生きていて良かったなと思い、生きがいであると思います」という重い言葉を、私たち日本人が受けとめて、今後どのようにしてこれに応えていくかが問われているのではないだろうか。

最後に、ご高齢にもかかわらず、この企画のためにナヌムの家からお越しいただいたイ・オクソン・ハルモニと、企画の実現のためにご協力いただいたナヌムの家の日本人スタッフの矢嶋幸さん、毎年ゼミ旅行でナヌムの家を訪問し学習会を続けている本学総合文化学科の石川康宏教授と、その活動について講演会で報告を行なってくれた同ゼミの学生さんたちに感謝の意を表したい。

(本学女性学インスティテュート・ディレクター 高橋友子)